昭和詩散歩　第６回

甘楽順治

前回に続き昭和３年に発行された詩人協会編『詩人年鑑 1928 年版』（アルス社）を散歩してみる。このアンソロジーは代表的な評論を掲載した後に、発行月別で同人誌から詩を収録し、後半では詩集からの作品をこれもまた発行月別に収録している。同人誌からの収録作品の冒頭は、高村光太郎の「火星が出てゐる」。

火星が出てゐる。

要するにどうすればいいか、といふ問は、
折角たどつた思案の道を初にかへす。
要するにどうでもいいのか。
否、否、無限大に否。
待つがいい、さうして第一の力を以て、
そんな問に急ぐお前の弱さを滅ぼすがいい。
予約された結巣を思ふのは卑しい。
正しい源因に生きる事。
それのみが浄い。

火星が出てゐる。
（以下略）

いかにも高村光太郎らしい倫理じみた詩行だが、反復される「火星が出てゐる。」という詩行がうまい具合に読みのリズムを形成してくれるので、今読んでもそれほど違和感はない。

このアンソロジーを編集した詩人協会は、大正を通して詩壇の中

心であった詩話会が解散し、その後を継ぐ団体として昭和の初めに発足した。前回触れたように、アンソロジーでは当時の詩を遍く収める、という発想で編集されているが、その中には民謡や童謡も含まれている。

勝原晴希編『『日本詩人』と大正詩　〈口語共同体〉の誕生』（2006年森話社）では、「「大正」が現代の「原型」であるとは、「口語」的である、ということである。とはつまり、「聞かれている」ということだ」（勝原晴希）と指摘している。昭和の初めはこの「口語」に開かれた「現代」詩を継承した時代ということになるが、一方で「開かれる」ことの代償についても指摘している。「大正という時代の〈新しさ〉に、「世界」や「人類」に、「民衆」の「生活」や「家庭」に、そして何よりも「口語」そのものに、アウラを見出している。けれどもそれらが充分に突き詰められず、一時的な徒花に終ったことは、やがて「昭和」にいたって、「皇国」・「大東亜共栄圏」という虚構の放つ強烈なアウラに吸収されていったことに、明らかだろう。「明治」から「大正」へと、人々は「野生」を脱し、「人間」へと自己形成を行なうようになっていった。だが同時にそれが、「国民」として、さらには「臣民」としての自己形成でもあったということに、どれほどの詩人が自覚的であったか」（勝原晴希）。

口語文体の開放は、「国民」に共有される民謡や童謡とも連動していたのだろう。そう考えると、冒頭の高村の「火星が出てゐる。」のリフレインも歌謡的な感じがしないでもない。実際にこのアンソロジーに掲載されている民謡を見てみよう。次に挙げるのは『民謡詩人』に発表された横瀬夜雨の「とても呑むなら」。

とても呑むなら　伊丹樽
灘の諸白、抜けかし　鏡

未練がましく　杯を
畳の上に　置くのが　悪ろし

呑まうは　ささうは　酒呑んで
腐る頭なら　腐らうと儘

（中略）

我も昔はのんだくれ
似たよな　似ぬよな　身ぢや程に。

横瀬夜雨はどちらかというと明治の詩人に近いせいか、歯切れが悪い。「身ぢや程に」と、民謡風に最後は決めているが、「開かれている」かと言えば若干怪しい。われわれの眼からみると、この詩はまだ前時代の近代詩の虜になっているようにみえてしまう。ここにはまだ民衆的でない詩人がいる。同じ『民謡詩人』の野口雨情の詩「荷物片手に」と比較するとその差は歴然としている。

こんなに恋（こひ）しい
　　この土地すてて
どこへ行くだろ
　　あの人は
どこへ行くのか
　　わしや知らないが
荷物片手に
　　傘さげて
わしも行（い）こかな
　　この土地すてて
荷物片手に
　　あの人と

これは白鳥省吾のエッセー「民謡と国民生活」（『詩人年鑑 1928

年版』収載）から判断すると、民謡ではなく俗謡ということになる。地方からの脱出願望を素材にしている点でも、野口のこの詩は民謡的ではない。白鳥は次のように述べている。

> さきに民謡と俗謡との差別を明らかにし、民謡は郷土的に存在し、俗謡は時代的に存在してゐることを言ひましたが、民謡が地方から東京へ流れて来た場合には、東京といふ大きい溶鉱炉の中に、その曲調も野趣を失ひ、歌詞も俗謡化されて来るのであります。
>
> 地方の民謡が東京で流行する揚合は、その地方の人が中央に勢力があったり、或は博覧会等の機会によるものであって「米山甚句」「松前追分」「木曽節」「磯節」「相馬節」「博多節」最近では「小原節」「安来節」などは人々のよく知るところであります。

前時代の詩の言葉に対して、口語を志向した言文一致と俗謡がこの時期、「現代詩」として詩の領土を拡張していた。その多様性の拡大はしかし「現代詩」のユートピアのようなものだったのかどうか。『詩人年鑑 1928 年版』には、この他にもプロレタリア詩やモダニズム詩、叙事詩といったものが含まれている。

現在のわたしたちの詩の言語は、良くも悪くもこのような広範な領土を失っているが、それと引き換えに「現代詩」としての曖昧な安定さを手に入れている。そしてそのことで今もなお詩の領土を越境するという行為が、これまた曖昧に保証されている。